

山形県 JAさがえ西村山

農業者の所得増大・農業生産の拡大

リンゴ輸出を大幅アップ

台湾中心に1億円突破 選別施設の集約が転機に

※シンカは、以下の3つの意味を含めた言葉。

自己改革の進化から深化へ、真価を発揮する3つの「シンカ」

自己改革 実践中!



リンゴの単価アップへ 輸出に活路

山形県のJAさがえ西村山は、リンゴの輸出を軌道に乗せて2024年、輸出向けの販売額1億円を突破しました。

国内需要が低迷する中、JAは単価向上を狙い、栽培が盛んな朝日町とともに04年から台湾に14トンの輸出を始めました。残留農薬規制が厳しい台湾だったが営農指導を徹底。輸送過程で果実が傷まないよう強化段ボールを採用するなど、さまざまな品質保持策を取り入れ、マレーシアやフィリピンなど東南アジアにも進出しました。輸出量は15年に72トンまで増えました。

一方、輸出に対応していたのが朝日町にある選果場だけで、台湾でニーズの高い大玉果の量を確保しにくいことや、処理能力が課題でした。



輸出先の店舗に並ぶリンゴ

選果施設の集約で輸出量・額が大幅に増加

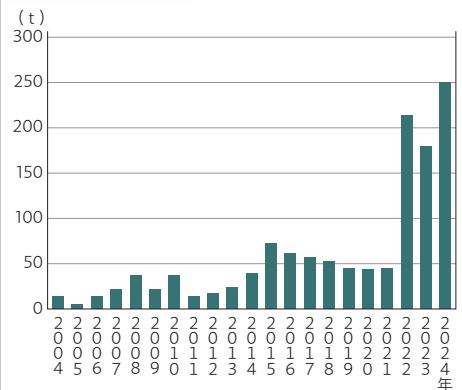
JAは、国の輸出拡大支援に関する事業を活用して、朝日町に広域選果施設を22年に新設しました。これにより、輸出向けのリンゴを大口ロットで集荷できるようになりました。品種は「シナノスイート」や「ふじ」など4品種で、輸出量は同年、前年の4倍以上となる210トン、輸出向けの販売額は6倍以上の9100万円に急増しました。



広域選果施設での選果作業

鮮度保持には、リンゴの過剰な成熟を抑える1-MCPを処理できる設備を導入。果実に空気を吹きかけてダニ類やモモンクイガなどの害虫を吹き飛ばす設備も取り入れ、鮮度や品質を保持しやすくなりました。現在の輸出先も、台湾が8、9割を占めています。

輸出量の推移



さらなる輸出の拡大へ 適期作業を指導

品質の高いJAのリンゴは引き合いが強く、今作も400～500トンの注文がありました。近年は気候変動により輸出向けの大き玉果を作りにくくなっていますが、JAは早めの摘蕾や摘果など、大き玉果を安定して作れるよう営農指導に取り組んでいます。

また、全農グループのバリューチェーンを活用した輸出産地づくりの取り組みと連携し、台湾向けりんごの輸出を着実に増やしており、今後も連携を強化してさらなる輸出拡大を目指します。



現地店舗での販促の様子

問い合わせ JA全中 JA組織・経営対策部 JA改革支援課 ☎03-6665-6040 ✉jakaikaku.s@zenchu-ja.or.jp

JAグループのホームページから、自己改革の成果をまとめた動画や全国のJAの取り組みがご覧になれます。

<https://org.ja-group.jp/challenge/>

発行/JA全中(一般社団法人 全国農業協同組合中央会)



JAグループ

耕そう、大地と地域のみらい。